

A Preview of Pavilions

Finland

想像力を共有する フィンランド館



A Preview of Pavilions Finland

2008年11月5日から30日、上海万博展示センターにまた一つ独特の景観が増えた。フィンランド館設計案の発表により、「上海万博フィンランド館紹介月間」活動が始まり、無料で一般公開された。

文：王焱冰 写真：徐潔晨

「人魚姫」は 遠い国からやってくる

無数に点在する湖、うっそうとした森林、豊かな自然環境、すぐれた福祉制度。フィンランドに対する印象は人によって違う。

2008年11月5日、上海万博事務局と上海万博参加フィンランド組織委員会が共同で主催する「上海万博フィンランド館紹介月間」の活動が幕を開けた。会場となった上海万博展示センター内にはフィンランドの雰囲気の色濃く漂っていた。紹介月間の開幕式でテープカットしたフィンランド環境相ポラ・レハトマキ女史は「中国人にとってフィンランドの最も知られていない領域は文化であろう。上海万博を通してフィンランドはもっと世界に注目され、経済・貿易・文化の交流と協力により多くのチャンスを作り出すだろう」と語り、より多くの人々に上海万博のフィンランド館を知って、フィンランドを理解してもらいたいという期待を寄せた。フィンランド展示ホールに入ると、薄暗い照明により神秘的な雰囲気が出されていた。極地の特色に富む音楽が始まると、盛装のサンタクロースが現れ、来場者にキャンディーを配り、現場は暖かいムードへと一変した。

これは展示企画者が見学者に与えたサ

A Preview of Pavilions Finland



フィンランド館の模型をカメラにおさめる見学者たち

中国2010年上海万博展示センター
住所 上海市淮海中路300号新世界大厦3F
電話 (86) 21-6335-3336
(86) 21-6335-3338

いが、少なくともわれわれは『インスピレーション』があることは確かなのだと思っ」とポーラ・レハトマキ女史は言う。しかし、上海万博展示センターという新しいコミュニケーションの場がこの問題に対する答えを出すだろう。ここでフィンランド館に対する評価を聞くことができた。

「フィンランドは非常に遠い国だと思っただが、今は思ったほど距離はないと思うようになった。上海万博はその距離を縮めた」と展示に携わるスタッフは感慨深く言った。

「フィンランド芸術の真髄は簡潔の美で

ある。素材で自然に近づこうとしているところは、フィンランド館も同様で印象的だった。たいへん期待に値すると思う」と芸術専攻の学生は憧れを胸いっぱいにつけてくれた。

「フィンランドの設計の真髄は、はっきりとした外観と実用性とのハーモニーである。」「ノキアの携帯電話やスタントの時計などを思い出させる。このような設計スタイルが大好きだ」と設計ファンがフィンランド館を囲んで研究していた。

フィンランドの出展テーマは「シェア・インスピレーション」。意見の交流と連動を促し、上質かつ全体的な生活プランを求め、都市生活をいっそう改善する道を探求している。

デザイナーの インスピレーション

1年後に上海万博の会場に現れるフィンランド館は「氷の壺」と呼ばれ、それを見れば「フィンランドと中国との距離は思ったほど遠くはない」と感じ取れる。このパビリオンの設計者のチーム・クルケラ氏は自ら上海万博展示センターを訪れ、来場者と対面し、フィンランドの芸術の成果やフィンランド人の世界建築における評価の高さを紹介し交流を深めた。

展示センターではフィンランド館の模型が特別に作られた。外観からこのフィンランド館はまるで湖に浮かぶ島のようにある。小さい橋を渡るとパビリオンの前が出る。その中心部分はダウンタウンと広場からなる。この広場が「氷の壺」であり、異なる考え方や価値観がここでぶつかり

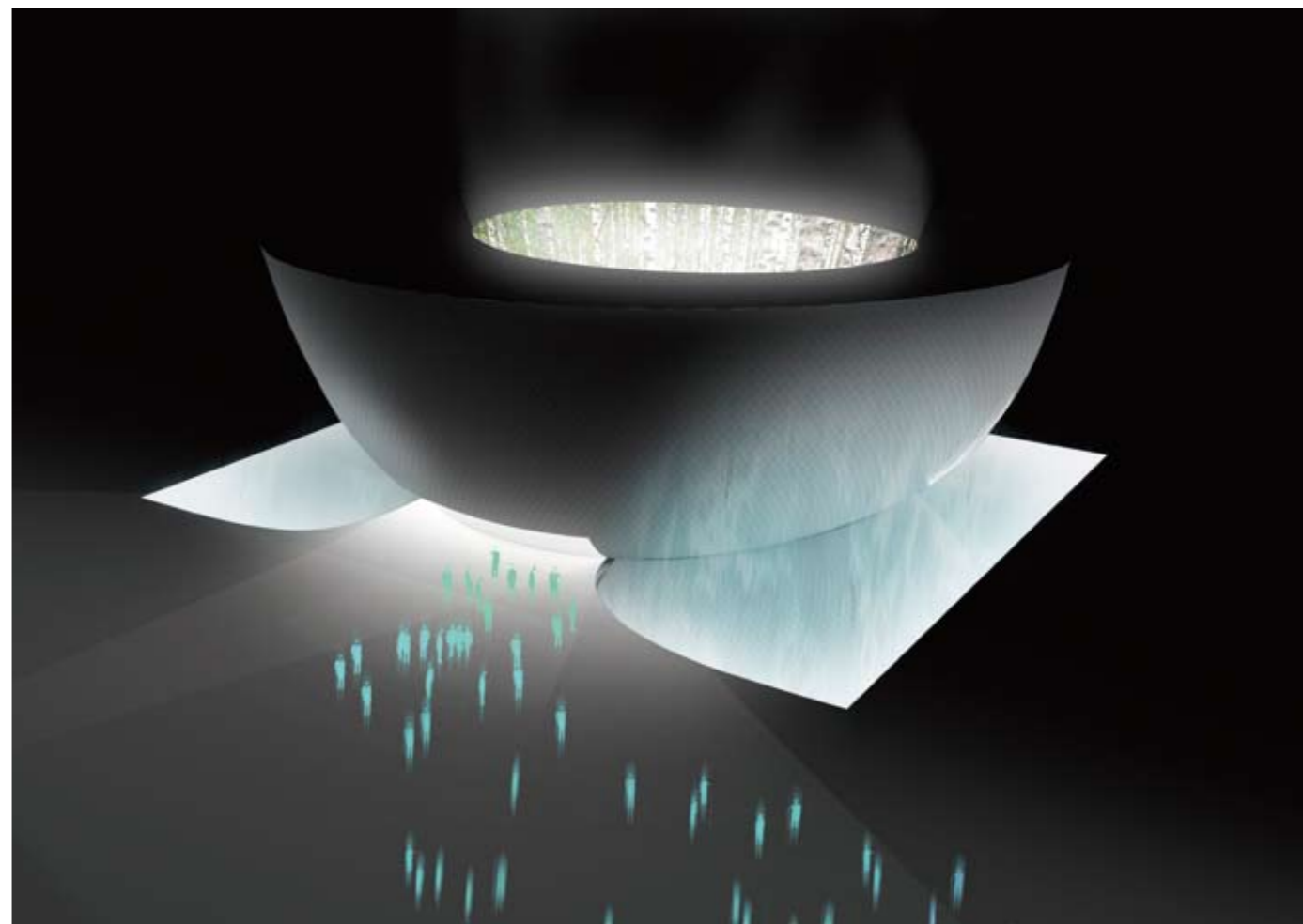
合い、交流して融合する。

フィンランド館のインスピレーションはクルケラ氏の去年の夏の体験に由来する。島や暗礁、透き通った波に映った投影、空や木々の香りなど、フィンランドの豊かな自然要素を改めて解説し、新しい姿をもってみんなの前に提示したいのだという。フィンランド館では大自然と同じように、中を散歩する人々に静かな憩いの場所を提供し、都市の喧騒を忘れさせてくれる。

「フィンランド人にとって知恵というのは複雑なことを意味しない。私はフィンランド館をもって小型のフィンランドを表現し、世界にフィンランドとその社会の風貌を示したい。パビリオンの彫塑式の建築設計は未来の発展に合った自由、創造力、革新の思想に満ちたありさまを作り出すところにある」とフィンランド館の模型のそばに立ったクルケラ氏は考え込みながら話した。

見学者の感想

「フィンランドは小さい国でありながらなぜ革新力がこれほど強く、どのように技術を環境保護に応用したのかと、いつも外国人の方々に聞かれる。これはひとことふたこと答えられるような問題ではな



フィンランド館完成予想図



フィンランドの自然風景



フィンランド館の内部



フィンランドの建築



ペルティ・フルト氏

福祉、知恵と環境

上海万博フィンランド館コミッショナー

ペルティ・フルト氏に聞く

文：王 焱水 写真提供：上海万博フィンランド出展組織委員会

北欧の国フィンランドは一番最初に上海万博に出展することを表明した。フィンランド貿易協会が上海万博参加の組織者として各出展作業を着実に推進している。記者は上海万博フィンランド館コミッショナーで「大勢の中国人の印象では、フィンランドは遠くて不案内の国のようだが、実際は想像よりはるかに近い。一年後にひかえている上海万博はさらに両国の距離を縮めるだろう」と語るペルティ・フルト氏にお話をうかがった。

絶好の舞台

「フィンランドと中国は国交樹立以来、ずっと良好な関係を保ち、政治、経済、文化等の交流活動も活発に行われている。これはフィンランドが上海万博に参加することに、よい基礎を築いた。」とフルト氏は言う。エネルギーの有効利用、環境保護技術、著作権保護など、フィンランドは中国と多岐にわたる協力を展開した。上海及び長江デルタ地域はとりわけその

フィンランドの四季

さわやかな空気、すばらしい文化、刺激的なスポーツが好きな人にとって、フィンランドは理想の場所である。フィンランドの自然は森林と水を主として、また千変万化にも富む。大自然を感じながらモダンな生活が営まれているのである。北部ラップランドには原始的な平原が広がり、東部には湖、南西部には美しい群島が数多く分布している。地域によっては四季の特徴が異なったり、東部と西部ではまったく違う文化遺産が残っていたり、真夜中の太陽があれば長い冬の夜もあったりして、変化に富む独特の風情をもつ。もつとも重要なのは、フィンランドは領土面積が小さいにもかかわらず、その国際的影響力が大きいということである。フィンランドは常にオープンな心持で他国と交流し、国際社会とその先進的な技術と知識を共有し、よりよい未来のために貢献してきたのである。

フィンランドはどのように上海万博で展示を行おうとしているのか。それが世界の人々の想像をかきたてる。

「フィンランドは『以人為本』（人間を本とする）を尊ぶ」とフルト氏は簡単明瞭に説明する。広大な森林と広々とした湖という自然環境でどうやって生きていく

重要な協力地域に当たるのである。「上海万博はフィンランドに中国ないし世界と知恵を共有し、経験を交流する絶好の舞台を与えてくれたのである」

フィンランドが積極的に万博に参加する目的を記者は最も知りたかった。フィンランドの知名度を上げたい、フィンランドの企業が世界、特に中国での競争力を強めたい、フィンランドのイメージを広めたい、フィンランドへの投資を引き込みたい、科学研究・教育・芸術・文化における交流を深めたい、観光業を推し進めたいと、フルト氏は詳しく答えてくれた。

「われわれはこれらの目標を順調に達成できることに自信を持っている」とフルト氏は補う。この自信はフィンランドの上海万博に対する関心の高さと積極的に参加する態度を示し、同時にフィンランド社会が上海万博のテーマに基づいているからであろう。

「発展途上国においても、先進国においてもグローバルな都市化の波がすでに押し寄せてきた」とフルト氏は話題を都市に切り替える。「上海万博は人類の都市生活を探求する大会であり、都市の持続可能な発展を論議する実践的かつ革新的な舞台でもあり、都市問題に対する史上最大の探求といえよう。これは確かにすべての人々を興奮させるに違いない!」と語った。

かをフィンランド人は常に探求し、結果として大自然と調和するライフスタイルを見出したのである。彼らは自然を尊び、革新を重んじて、ハイテクを都市生活にかしながら、人を取り囲む環境を非常に大切にしてきた。フィンランドのこの人間重視の発展理念は上海万博のテーマをもうまく表現できるとフルト氏は考える。

上海万博期間中、フィンランドは「シェア インスピレーション」というテーマのもとで近年の都市と社会との調和のどれた発展において得た経験や成果を世界の見学者に対して展示を行う。「フィンランドは都市発展を全面的かつ総合的に考慮し、持続可能な発展を模索し続けてきた」と氏は言う。

フルト氏は特にフィンランド第六の都市オウルを例にして話す。オウルはオウル川がボスニア湾に注ぐ場所に位置し、フィンランド北部の経済と文化の中心地である。この都市に話しが及ぶのは、オウルが上海万博ベストシティ実践区にプロトタイプを出品したからである。これによりいっそう多くの見学者にオウルという長い歴史をもつ都市、古い港や市場およびその美しい風景などを知ってもらえるだろう。出展のテーマは「今日の未来技能——オウル学校の革新」であり、知識型の社会が成り立つ重要な部分は生涯学習へのサポー



フィンランド館の外観

A Preview of Pavilions Finland

トであることを訴えたいのだという。

巨大な壺形パビリオン

最後に世界が関心を寄せるフィンランド館について、フルト氏は最新情報を教えてくれた。

「われわれはフィンランド館が恵まれたロケーションにあることをうれしく思っている」とフルト氏は言う。フィンランド館は万博会場のC区に位置し、ちょうど盧浦大橋の東端の傍にあるため、建設中のモノレール13号線の万博会場駅からわずか80メートルしか離れていない。「フィンランド館がより多くの参加者を呼びよせ、多くの中国人の観光客でにぎわってほしい」と氏はとても期待している。

アウトドア派は絶好の環境と心身ともにリラックスしたい、旅好きな人は「森と湖の国」フィンランドを体感したい、芸術愛好家はこのフィンランド館でフィンランド人の設計理念を感じたい……。

フィンランド館設計案の名前は「キルム」。その意味は「氷の壺」である。どんなに巨大な「壺」で、何が入っているのかは、たしかに吟味するだけの価値がある。

面積約3000平方メートルの「氷の壺」は、フィンランドのハイテクとヒューマニティの特徴を融合させ、彫塑式の建

築設計は自由、クリエイティブ、イノベーションに満ちた未来像を作り出す。水面に浮んだ小型の島都市のようで、橋に導かれ水をわたり、パビリオンの前に出る。

パビリオンは首都ヘルシンキにある建築設計事務所JMMの設計士によるものであり、設計にあたり、そのインスピレーションはフィンランドの自然から得たという。たとえば、島、岩礁、魚鱗、波、空、また木々からのすがすがしい香りなど、さまざまな自然要素がパビリオンのなかで改めて定義し再現される。これは「騒々しさから離れた静かな港なのである」とフルト氏は言う。

「フィンランド館は『美しい生活』を出発点とし、調和のとれた生活のモデルを来場者に示したい」という。フルト氏の説明によれば、これが「氷の壺」がコンペに参加した104の設計案から抜き出た理由だそう。この設計はエコのニーズに応え、万博後の再利用も可能になっている。また、万博のテーマにあわせ、「福祉、知恵と環境」という三要素をめぐっての展開が設計の真髄でもある。

確かにフィンランド人から見れば「福祉、知恵と環境」はすなわち「ベターライフ」を作り出す基本要素であり、「ベターシティ」を築き上げる堅実な基礎でもあるのだ。